

宝石と洪水の街で生きる

土田 亮*

「リオ、この街では宝石と洪水は密接に関わっているんだよ」

これは筆者の研究対象地であるスリランカで、調査に同行してくれた行政職員が語った言葉である。私はこの言葉にハッとしたり、なぜそのように感じたのか？ 研究対象地であるスリランカのある地域を中心に、災害研究と地域研究のレンズを通して述べていきたい。

スリランカと洪水災害

スリランカ民主社会主義国（以下スリランカと称す）は都市部で近年、急激な人口集中、ダムや堤防、警報などのインフラの未整備、また、違法ではないが、人口増加によりこれまで住まなかった洪水氾濫域に人々が居を構えるようになった。加えて、スリランカには4つのモンスーン期があり、とりわけ「ヤラ (yala)」と呼ばれる5月～9月の南西モンスーン期では、南西から吹く風によって運ばれる水を豊富に含んだ雲がスリランカ中央の山岳地帯に遮られることで島の南西部に多量の雨をもたらす [Ministry of National Policy and Economic Affairs and Ministry of Disaster Management 2017]。これらのことで、スリランカの都市部では、災害発生リス

クのある地域に住んでいるために人や地域の脆弱性が高まったり、豪雨による洪水や土砂災害により、人口・財産が危機にさらされたりしている。

2017年5月末には南西モンスーンがスリランカ全土に大雨と強い風をもたらし、2日間の降水量は600 mmにまで達した。この豪雨はスリランカ25県のうち15県で急激な洪水や地滑りを引き起こし、約90万人の被災者を生み出した。とりわけ被害が大きかったラトゥナプラ県ではおよそ6万世帯（約24万人）が被災し、住宅約800軒が全壊、約1万軒が一部損壊したことが報告されている [Ministry of National Policy and Economic Affairs and Ministry of Disaster Management 2017]。この豪雨洪水災害により、スリランカは2017年に最も気候変動の影響を受けた国第2位に位置付けられた [Eckstein *et al.* 2018]。

筆者の調査対象地であるラトゥナプラ県は、スリランカの主要都市コロンボ市から東に約90 kmに位置するサバラガムワ (Sabaragamuwa) 州の州都である。その中心都市であるラトゥナプラ市は、カル川 (Kalu Ganga) 上流にあり、四方の山地からの河川が集中する地点に位置している。また、カル

* 京都大学大学院総合生存学館

川の下流低平部と上流盆地の境界地点は流路幅約 50 m のボトルネックとなっている。これらの地理的要因がラトゥナプラ市での洪水被害を助長する一因になっている [小松ほか 2005]。

ラトゥナプラ市と周縁部の主要産業は米や野菜などの農業、ゴムやココヤシなどのプランテーション農業であり、総労働人口のうち、4分の1が公務員で、残りは民間企業や農業セクターで働いていたり、宝石産業や飲食業などの自営業であったりする。多くの世帯でもともと収入が安定していないため、洪水災害によって生計が成り立たなくなるリスクがある [UN Habitat Sri Lanka 2015]。

ラトゥナプラ市街地の様子が写真 1 である。幹線道路に沿ってバスターミナルやスーパーマーケット、路上市場、市役所、図書館、警察署、飲食店、診療所など主要な機能をもった施設がある。街の中心を流れるカル川周辺には持ち家や個人経営の店舗が分散している。川に架かる橋から見渡すと、川には堤防は敷かれておらず、住宅が稠密している (写真 2)。これらの住宅は極めて洪水リスク



写真 1 ラトゥナプラ市街地の様子



写真 2 カル川にかかる橋から見える風景

の高い場所にあるわけだが、必ずしもカーストなどの社会階層によって配置されているわけではなく、代々住んでいる者もいれば、わざわざ土地を新しく購入して家を建てた世帯もある。

宝石と洪水が映し出す現実

ここで冒頭の言葉に戻りたい。筆者が 2018 年 3 月中旬に行なった現地調査の際に、ツテを辿って同市で宝石を発掘する人たちのもとへ案内された時のことである。以下では、ラトゥナプラ市の中心からおよそ 10 km 離れた、カル川の支流のそばにある村での出来事についてのフィールドノートの記録である。

2018 年 3 月 23 日 (金)

よく晴れた日の午後 2 時を過ぎた頃だった。私は案内役をしてくれた 30 歳代の男性行政職員のバイクに乗せてもらい、舗装されていない道を鞭打ちになりそうな衝撃に耐えながら進むと、1 軒の小屋にたどり着いた。私はバイクから降りて 6 畳ほどの広さの掘っ立て小屋を覗いた。そこには、やせ

細った老人，小太りの中年男性，健康そうな若年男性，そして明るい笑顔の小さな男の子がいた。4人は見知らぬ私に対して，右手を顔の高さほどまで上げて陽気な笑顔とともに挨拶をしてきた。3人の大人は上半身裸で，下は短いパンツを履いているかサロンを巻いている。小屋の中や採掘の現場を見ていかと聞くと，「カマック ネー（構わない）」と首を支点にして顔を揺らす仕草をした。

小屋の中は，床は土がむき出しの状態で，階段のないロフトがついていた。ロフトの下端は土嚢袋や機具，生活用品を置く荷物置きとして，上段は生活や休憩をする場所のようだ。彼らが生活の拠点にしているこの小屋は，茅葺き屋根とバナナやココヤシの葉で編まれた壁，竹や木の柱と，非常に簡素な作りであった。

その小屋のすぐ隣には宝石を発掘するための小屋があり，そこには垂直下方向に20m，その底辺から水平に20mの穴が掘られていた。穴の大きさは成人男性2人が通るのがやっとなくらいである。どのように宝石を見つけるのか中年男性の話聞いてみたところ以下のようなことだった。まず，大雨で洪水がやってきて川が氾濫する。そうすると上流から原石の混じった土砂が流れ込んで，その土砂が穴に入ってくる。洪水の程度によって2～3日程度で水が引く場合もあれば，1週間も水浸しの時もある。水位がある程度下がった後，エンジンポンプを使って穴の外や近くの川へ排水し，水平の穴のあたりまで排水したら人が入る。穴に入って作業をする人が酸欠にならないように，地上ではポンプ



写真3 宝石を発掘する小屋と人びと

を作動させて穴の中に空気を送る（写真3）。こうして底に溜まっていた土砂を土嚢袋に詰め込んで釣瓶方式で地上に持ち出す。地上では別の人が土嚢袋から一塊の砂を箒に取る。その後，近くの川に移動して箒で細かな砂と小粒の石に篩いかける。箒に残る小粒は文字どおり玉石混淆の状態である。

私は排水と換気を行なうポンプの音に圧倒され，宝石探索の現場を初めて見た高揚感に浸っていた。再びバイクに乗って帰る時，同行してくれた男性職員が発したのが冒頭の言葉である。私は虚を突かれて「それはどういうことなの？」と聞き返した。男性職員がバイクに乗りながら淡々と私に話してくれた。

「彼らみたいな人たちは，決して一攫千金を目指して宝石を見つけるという夢に安易に乗っかっているわけじゃない。皆が好き勝手に穴を掘り出すわけじゃない。彼らは慎重に場所を吟味し，なけなしのお金を払って必要な機械や掘削権を買うのさ。だから，巨額の宝石を見つけ出すまでは買取った土地や穴を放り出すわけにはいかない。時には今日見た三世代の男たちのように，家族一丸となって

リスクな生業に身を投げ出すような人たちもいるよ。とはいえ、必ずしも自分たちの作った穴に原石が流れ込んでくるとは限らない。それに、彼らの行為は違法ではないけれども、洪水は原石をもたらすかもしれないけど同時に自らの命や生活を危うくさせることもあるよね。それでも彼らはどうにか宝石を見つけ出そうと働くのさ。たとえば、市街地の方に置いてきた家族の生活を養うためにね。」

男性職員の話聞いて、私はこれまで論文や報告書で考えていた災害と人の暮らしとの関わりを、違う角度でみたような気がした。

災害研究と地域研究

「リオ、この街では宝石と洪水は密接に関わっているんだよ」という言葉について考えてみたい。

ラトゥナプラやその周縁の人々にとって、洪水災害は紛れもなく生活の一部である。それはある人にとっては困難や悲しみをもたらすものでもあれば、別の人にとっては生活の糧や生き生きとした喜びをもたらすものでもある。そこで私が住民を過度に逞しい存在として見たり描いたりすることも、不当かつ一方的に搾取される声なき可哀想な存在として感じ取ったり表象したりすることも、おそらく現実を十分に捉えてはいないし、彼ら彼女らが望む描かれ方でもないだろう。フィールドで出会う場面からそこで暮らす人々について何をどのように理解し、それをどのように書くのか。被災地でのフィールドワークとしては、たとえば、清水による被災者の語り

の記録は、非常に精緻に現実を描きながら、それでも強く情緒を揺さぶってくる [清水 2003]。筆者もいつかこうしたアプローチでスリランカのことを書いてみたいと思っている。

筆者が何度かスリランカに渡航したこの数年にも、両国では稀にみる大規模な自然災害が立て続けに発生した。直近では日本でも台風 15 号や 19 号が発生し、多くの犠牲者や長い避難生活を余儀なくされる人々を生み出した。その間も筆者は、文献を読んだりデータを分析したりといった大学院生としての日常を過ごしている。調査に行くべきか、分析に徹するべきか悩ましい時期が何度もあった。災害研究に限らず、地域研究も、現地での〈日常〉―〈非日常〉を身体で感じることで、これまでもっていた自分の当たり前やアイデアが崩れることが多い。しかし、長い時間現地に関与しながら〈日常〉―〈非日常〉をつぶさに観察し、考え続けることは重要である。私はこのことを信じて、これからもよりよい災害復興のあり方を被災地・被災者と深く、そして広く関わりながら考えていきたい。

引用文献

英語文献

- Eckstein, D., M.-L. Hutfils and M. Wings. 2018. *Global Climate Risk Index 2019*. Berlin: Germanwatch e.V.
- Ministry of National Policy and Economic Affairs and Ministry of Disaster Management. 2017. *Sri Lanka Rapid Disaster Needs Assessment Flood and Landslides, May 2017*. The Ministry of Disaster Management and Ministry of National Policy and Economic Affairs in

collaboration with the United Nations, World Bank and European Union.

UN Habitat Sri Lanka. 2015. *Ratnapura, Disaster Risk Reduction and Preparedness Plan: Towards a Sustainable and Resilient City*. Disaster Resilient City Development Strategies for Sri Lankan Cities.

日本語文献

清水 展. 2003. 『噴火のこだまーピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会.

小松利光・田中 仁・戸田圭一・清水康行・藤田正治・石野和男・風間 聡・牛山素行・勝濱良博・Srikantha Herath・Bandara Nawarathna. 2005. 「2003年5月スリランカ南西部水害調査報告」『水工学論文集』49: 433-438.